論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　韓　静妍

本研究は、非情の受身（非情物を主語にした受身文）の発達を中心に、近代以降の日本語の受け身文の変遷を主題としている。

非情の受身については、固有説（非情の受身は古代から存在するとする説）、非固有説という二つの説に並存したが、今日では非固有説はまず認められていない。しかし、近代以前の非情の受身には強い制約が存在し用例数が至って少ないということも、通説として認められている。一方現代（戦後）では、非情の受身は受身文全体の半数近くに分布を広げている。すなわち近代以降、非情の受身は大いに発達した。その原因は西洋語の翻訳の影響だろうと推測されてきたが、詳細は十分に明らかとは言い難かった。本研究は、近代以降の豊富な調査資料を基に、はじめてその実態を示して変化の様相を明らかにし、変遷の論理を考察したものである。

本研究は、まず１８８０年以降の日本語の口語体の小説を１９６０年代まで１０年単位で調査計量し、その結果、各年代の同一言語量において、非情の受身が絶対数、（有情に対する）相対頻度ともども瞠目すべき増加を示していること、また２０世紀の半ばまでにその変化がほぼ完成していることを明らかにした。 特にその相対頻度は１９世紀の１０％台から２０世紀半ば以降は４０％台に達している。続いて本研究は、その結果、高原状態に達するまでの各年代で翻訳小説における非情の受身の頻度が、数％から１０％ほど高めであることを明らかにした。しかし、この程度の頻度では翻訳書が日本語に対して強い影響力を発揮しているようには思われない。ところが、本研究はさらに翻訳思想書・学問書（一部文語体）を同様の方法で調査し、その相対頻度が１９世紀に５０％を超え、２０世紀半ばまでに９０％の高率に達していることを明らかにした。絶対数も同時期の日本小説・翻訳小説の５～６倍にも及んでいる。そこで本研究は、翻訳文献の中でも思想書の影響がより強力であったのではないかと結論づけている。これらはすべて、本研究が全く新しく指摘し得た事柄である。

以上は主に、非情の受身の変遷の量的側面に関係する。本研究はさらに、変遷の質的性

格についても次のような指摘を行っている。まず非情の受身文の主語面では、固有非情受身の主語（非情物）が大部分単純なモノ名詞であったのに対して、近代以降では抽象名詞が増大した。述語面では、受身文の動詞の異なり語数も増大したが、特に動詞の自他対応に注目すると、無対他動詞（対応する自動詞の無い他動詞）の増大が目立っている。また固有非情受身では、現代語の「～られている」のような状態性の表現が大部分であったが、近代以降では受身文はその制約から次第に解放された。また先行研究では、能動文の動作主が受身文では近代以降西洋語の影響で「によって」で表示されると予想されていたが、「によって」の出現率が一貫して低いことが示され、むしろ動作主は表示されない割合が非情に高いことが明らかにされた。著者はそれを、動作主は必須の表示要素ではなく付加的な修飾語であると解釈した。以上のうちの多くは、本研究が全く新しく指摘し得た事柄であるか、予想されてはいたものの本研究ではじめてその実態が明らかとなった事柄である。

本研究は最後に、非情の受身増大の日本語内部の動因として、非情物を主語とする自動詞的対応項への表現欲求を指摘している。

以上のように、本論文は綿密な調査によって近代日本語受身文の変遷様相をはじめて明らかにした画期的な研究と言える。しかしながら、全体様相をまず明らかにすることが本研究の中心課題であったため、個々の事例の論理的な位置付けにもの足りない部分が残っている。翻訳の影響についても、具体例に即した指摘が十分に行い得たわけではないし、欧文原文との対照が十分に検証されたわけでもない。今後のより論理的かつ詳細な記述が期待されるが、逆に言えば、そのような課題の水準は本研究によって一挙に押し上げられたのであって、その点に本研究の最も大きな意義が認められると言える。今後の近代日本語受身文の研究は、本論の水準から改めて出発しなければならない。本論文は、以降の参照研究として範例を示し続けることになることは確実である。

したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するのにふさわしいものと認定する。